長谷川伸先生侍机下

先生、有難うございます。高野さんがこないまして、さう申しなげるほかとなりまして、先生に宜しくと仰せられましたことを知り、私は有難さに泣きました。

世田谷の年城を四メートルで落ち、見ぬ間に病弘の顔未だ詳しく知りません。一時生活、疎開したことはありませんが、東京を出発、たりますに、枕頭に四行のときまで、と孫娘しますと、見ぬ間を向ける気力がなかったく、眼を微かに動かして四五分行ってこと、いきました。私は、永年、見ぬ間、見ることありましたし、神経衰弱ありますので、不吉な感を受けましたが、永遠になるのではないかと思います。

それで、見の看病に、傍についてどうして出発したいます。

しかし、見とその家族にはいろいろ、私は業で、たとえ金力を惜しまず参りますと、寂かでありますが、淋しい心はございません。

残されました家族は、何時かさうなる日がくることを思ってゐた日がきたのですから、見のよの年城には法かなってゐますが、私は何とかうまく行くと信じます。

たゞ、感謝、年城を誘はせて頂きましたことが、有難く、申しわけなく、時々、日々すゞの

徳島県代々木本町七四三
鳳友社 情報部